



美しい自然に抱かれた、谷あいの山里

西栗倉村は、人口約1,500人。岡山県の北東端に位置する谷あいの山里だ。村の面積5,797haのうち5,491haは森林。その約85%が人工林。源流域は樹齢200年以上のブナやカエデ、ミズナラ等の自然の植生が残され若杉天然林と呼ばれている。



「上質な田舎」の実現に向けて「百年の森林構想」が進行中

2008年に「百年の森林構想」を着想し、樹齢百年の美しい森林に囲まれた「上質な田舎」の実現に向けて歩む。



290kWの小水力発電所「めぐみ」

西栗倉村は、CO<sub>2</sub>排出量を2030年に25%削減(2011年比)、2050年に40%削減(同)を設定している。1966年から稼働し2014年に改修を終えた小水力発電所「めぐみ」(290kW)は、固定価格買取制度(FIT)の活用で年約7,000万円の売電収入をもたらし、これを財源に更なる森林整備や再生可能エネルギーの整備に取り組む。

栗倉神社境内に屹立する、大杉(ひのき)

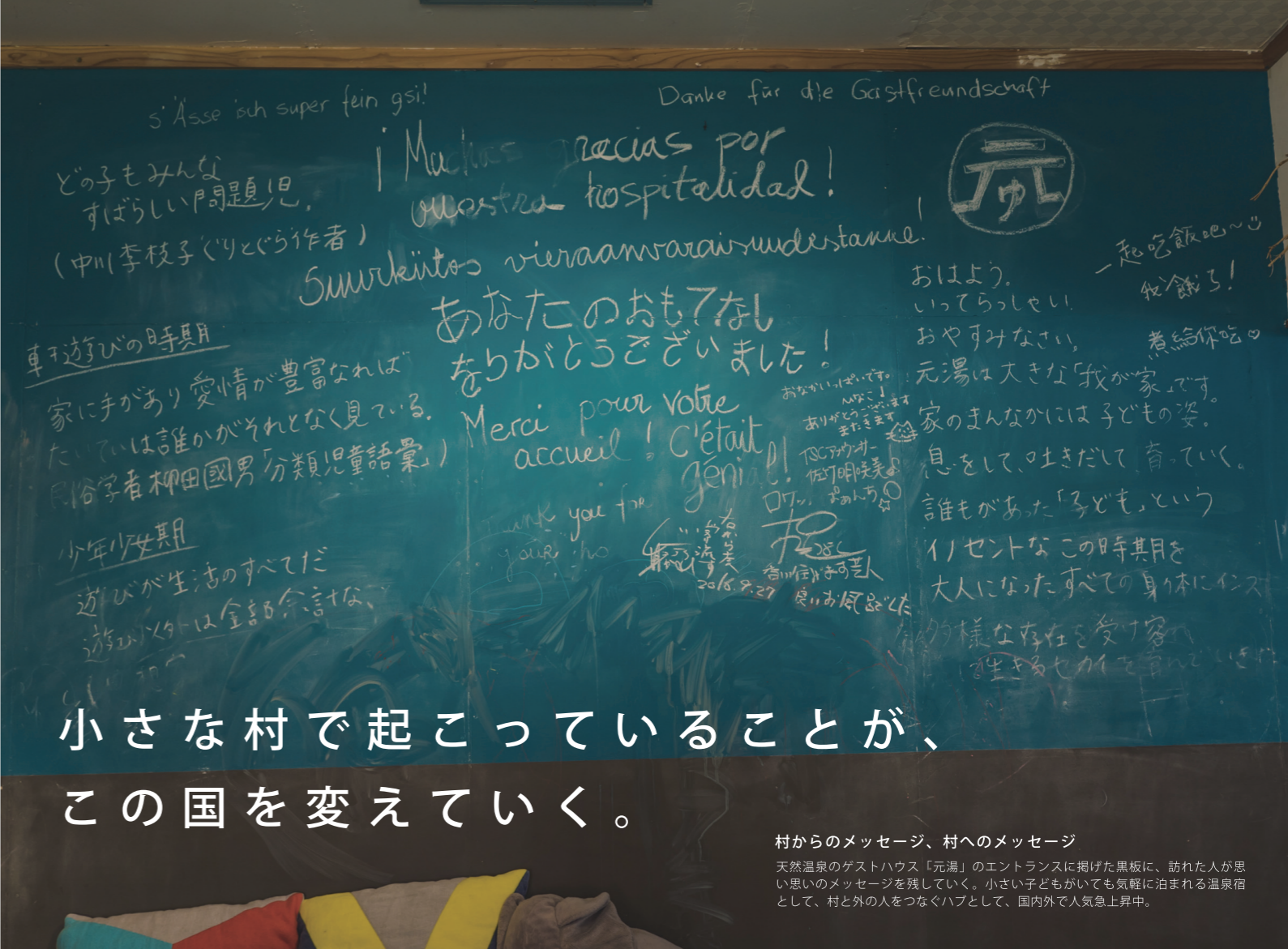
村史によれば、樹齢800年。目通り6.1m、樹高35m、県下最大の老木。継いでいくべきものへの思いは、先祖代々土地に住む人も、新しく暮らしはじめた人も同じだ。西栗倉村指定天然記念物第1号。

小さな村でもEVステーションは3カ所に。



西栗倉村長 青木秀樹

1954年生まれ。1995年から西栗倉村議を務め、2011年から現職。前村長道上正寿さん(美作東備森林組合 代表理事組合長)の後を継ぎ、「百年の森林(もり)構想」を推進する。



小さな村で起こっていることが、この国を変えていく。

村からのメッセージ、村へのメッセージ

天然温泉のゲストハウス「元湯」のエントランスに掲げた黒板に、訪れた人が思い思いのメッセージを残していく。小さい子どもがいても気軽に泊まれる温泉宿として、村と外の人をつなぐハブとして、国内外で人気急上昇中。

# NISHIAWAKURA VILLAGE

森は、これからこの星を生きていく子孫のためのもの。みんなで百年守ろうと決めた村が、全国から注目されつつある。ローカル・ベンチャーの取組みも、この村から発信されていく。

種蒔きがはじまった。小さな村のひたむきな試みが、日本を変えていく。

源には、新しい人を受け入れて生かす、懐の深さがあった。

「いかに山奥で人が少なからうかが、我々にはここでやるべき仕事がある、という思いでした」。平成の大合併を拒み自立を選んだ2004年当時の西栗倉村を、青木秀樹 西栗倉村長はそう回想する。

当初のよりどころは観光だった。村の95%が山林で、その85%が50年前に植林した人工林。スギとヒノキが主だが、木材の価格低下、人口減少と高齢化から山を世話する人は減り、森林は荒れ放題。観光だけでは足りない。もがきながら足もとを見つめ直す中から、より根本的な課題解決へと村は舵を切る。

「それが2008年に立ち上げた『百年の森林(もり)構想』です」。山主が50年かけて育てた森林の管理を村が預かり、地域資源として事業化することで自立し、50年後の未来に残す取組みだ。「それには間伐が不可欠。人工林も間伐に取り組みと下草が生えて山が復元され、生態系が生き返る。そこに50年かけてたどりつこうと決めたのです」。

資金はない。村の思いを共有してくれる人を一口5万円で募る「共有の森ファンド」を立ち上げ、間伐材

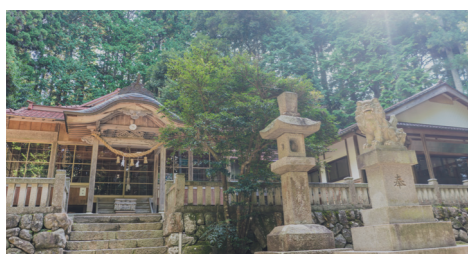
で割り箸を作ることからはじめた。「使い捨ての割り箸は森林破壊の元凶。でも間伐材に変えれば森林は蘇るんです」。思いに応えた人たちから4,200万円が集まり、機械を買い林道を拓き、割り箸を作りはじめる。

同時に、村の森林資源を商品化する(株)西栗倉・森の学校を立ち上げ、ネット上にショッピングモールを作る。間伐材の床タイル「ユカハリ・タイル」が都市の若者の間でヒットした。「賃貸住宅は勝手にリフォームできないしお金もない。でも、みんな木の感触が欲しかったんです」。「ユカハリ・タイル」は床に置くだけのフローリング。引越す時も持っていける。間伐材が主役の新しいニッチ市場が生まれた。

ヒノキの家具を作る「木工房ようび」も立ち上がった。ヒノキは外国にない素材。椅子一脚でも高価だが、世界からも注文が絶えない。2016年に工房が全焼する事故があったが、スタッフも全員残り、村も支え、再起の道を歩む。

「小さな村で起こった3つのことです。でもこの地殻変動は日本を変えていける可能性があると思います。え、いける可能性があると信じませんか?」と、青木村長は強調する。村だけでは成し得なかった。現場力のあるコンサルタント、ファンド作りのプロ、都市の若者が共感する商品やホームページを作るデザイナー、多くの「よそもの」の思いと力を借り、状況を切り開いてきたのだ。「村が続くとすれば人材が集まってくる。昔から、よってきたなあ、なにがしたい?」と外の人を受け入れ、情報を取り入れてきた。DNAに組み込まれているのかなと思う。こういう地域のあり方、西栗倉村にできるんだから、みなさんも絶対できますよ」。

「お人好しな村」と笑う笑顔のむこうに、未来への真剣なまなざしがあった。



関西以西にない江戸獅子舞が残る栗倉神社

宝暦8年(1758年)、神官同士が神社の呼び名の意味を巡って争い、当時の藩に吟味を願い出たが取り合われることなく、江戸に赴き奉行所で評定。数ヶ月に及んだ江戸滞在中に獅子舞を体得し村に持ち帰った。以来、伝承芸能として現在に受け継がれる。





1. 薪になる間伐材のC材。村から1tを6,000円で買い上げて、森林組合工場内で加工。2.3.運営する「元湯」と日帰り温泉「湯〜とびあ黄金泉」の薪ボイラーに、ひたすら薪をくべるのが日課の仕事。4.5.「元湯」の稼働率は高い。西栗倉村産品も並び、村のショールームの役割も。



6. スギ、ヒノキの間伐材は節やゆがんだ木目が味になる。7. 50cm四方という規格外加工を自社でできた点が勝因。8. 旧ナカバヤシ岡山工場をリユースし、製材から加工までを一貫体制で。9. 「ユカハリ・パネル」はバリエーションも豊富。香りにはリラックス効果も。



**薪** ボイラーで温泉を温め、薪でごはんを炊く。バイオマスコンサルティング会社、村楽エナジー(株) 代表取締役の井筒耕平さん運営のゲストハウス「あわくら温泉元湯」のエネルギー利用だ。「百年の森林構想」の間伐材活用

間伐材だから生かせる、なんて誰も考えなかった。



子ども連れのフレンドリーなゲストハウス。

のひとつが化石燃料に代わる熱エネルギー利用。「導入ハードルが低いのは薪。村の間伐材のうちC材(低質材)を使えば、薪割り機と乾燥場所があればいいんです」。2013年に、村は日帰り温泉施設の温泉加熱に薪ボイラーを導入し、コンサルタントだった井筒さんがそのまま薪を作り供給するプレーヤーになった。「実は村にやる人がいなかったんです」と笑う。2015年からは「元湯」の運営も村から委託。まもなくはじまる小・中学校を含む公共施設への地域熱供給も木質バイオマスボイラーを使う。地域資源を生かして循環させること。「村楽エナジーも薪ボイラーも、その手段」と、言い切る。化石燃料を間伐材の薪に替えば森が整い、CO2排出量も削減。木は村内から買うのでお金は村に留まり、循環する。

「元湯は子ども連れが泊まれるゲストハウス。土日や連休は家族連れのお客様が多いです」。村で作られるヒノキの家具やおもちゃが置かれた木の空間は心地よく、ここで過ごす時間そのものが、西栗倉村を知ってもらういい機会になっているようだ。

「当初はなかなか根付かなかったのですが、森にいいということ発信し続けた」。経営危機も体験したが、品質に磨きをかけ、今では企業や法人からの引き合いも多い。「自社オフィス需要や不動産会社のDIY賃貸部門とか。でも村だけで供給は無理。地域分散型で現地生産&出荷ができるようにしたい」と、一社で独占し大量生産する手法をとらず、他地域のサポートも手がけ出した。「日本の国土7割が森林。どこでも作れるので国産材マーケットを伸ばしたい」と、語る。一気に動けば、日本全体の林業が動かせる。



村楽エナジー株式会社 代表取締役 井筒耕平さん

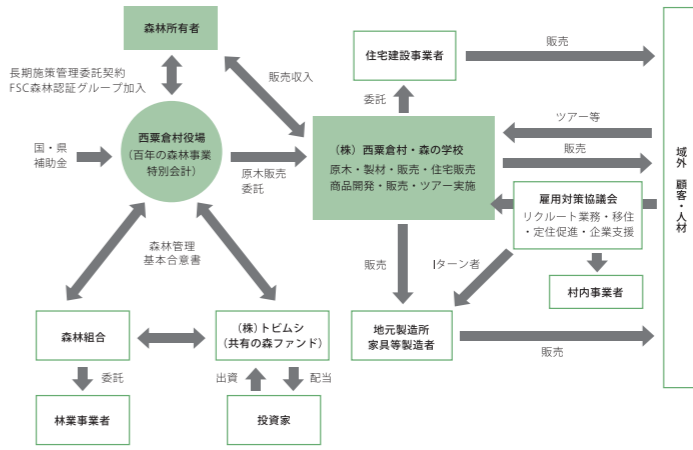
バイオマスコンサルタントとして2014年に西栗倉村に移住。「あわくら温泉元湯」と村内にエネルギーを供給する新工場を運営。2児の父。起業しやすい西栗倉村の自由な姿勢にリスペクトし、全国の自治体に起業による地域おこしのアドバイスをする機会も増えている。



株式会社西栗倉・森の学校 代表取締役社長 井上達哉さん

2010年に西栗倉村に移住。森の学校創設時からのメンバー。「百年の森林構想」というエシカルな理念が個人に伝わるBtoCを重視し「ユカハリ・パネル」など商品はECサイト「みんなの材木屋」で販売し、都市部への店舗進出間近。材料作りと建築と施工が同じステージに立てる家づくりも視野にある。「林業を未来志向にして産業としての地位を上げたい」と語る。

西栗倉・百年の森林事業 概念図



「100年の森に囲まれた上質の田舎を実現しよう」。人口1,500人あまりの村の思いを、環境保全や社会貢献を事業領域にするエシカルな企業、団体、投資家が出ることによって、「百年の森林構想」は2008年に動き出した。



西栗倉村 産業観光課 課長 上山隆浩さん

大学卒業後西栗倉村役場に入り、村内の観光施設2軒の経営テコ入れに奔走。現在は、森林政策を担当。「百年の森林構想」立ち上げ当初から深く関わる。



西栗倉村 百年の森林構想推進係 係長 長井美緒さん

大学で林学を専門に学び、林野庁の職員に。林野庁から出向して、現在は西栗倉村の百年の森林構想担当。山主との粘り強い交渉に心を砕く。

50年先のこと、わからないなら みんなでつくればいい。

山 主が50年かけて守り育てた森林資源を適切に管理し有効利用しながら、持続的な経営を行う。2008年に始動した「百年の森林(もり)構想」だが、決して順風満帆だったわけではない。むしろ試行錯誤の連続で、今もその中にある、と西栗倉村産業観光課課長の上山隆浩さんはいう。「村内で総論合意のための説明を2回、また各地区で図面を広げて各論を説明する。個別案件との調整を2年続けました。」「当然、課題が生まれます。」「資産を村に預けて、勝手にとられてしまうのではないか。」「何十年も先のことに誰が責任を持つのか」という議論です。村の森を守るという総論には賛成だが、各論に反対という意見もある。「粘り強く時間をかけてわかってもらうしかない」と、考えている。

2016年時点で、目標とする3000haのうち1400haが契約。本年度中に1500haまで広げたいところだ。「山主さんのうち四割が全国に分散しています。手紙や電話でお知らせしても、なかなか趣旨が伝わりません。自伐林家の人の助けも借りながら、あたっているところですよ」と、西栗倉村百年の森林構想推進係係長の長井美緒さんも語る。いつばう役場が全部やるのではなく、得意な人たちにまかせようと、商品開発と顧客開発を地域内ローカルベンチャー企業に託した結果、村の林業全体の売り上げ累積が当初の1億円から8億円(2016年現在)に伸びた。その結果、木材需要が増え、今は需給バランスの調整が必要になってきている。

「今後は、契約と管理の効率化のために、役場で行っている業務を会社化する予定です。西栗倉村の林業の川上から川下までを、最終的には専門組織で運営しようと考えているんです」と、長井さん。

構想の始まりから8年。10年の節目の前に「百年の森林構想」は第2フェーズに移ろうとしている。

「行政にできないことを民間と一緒にやったことが強かった。スピードも速い。協力しようという人も集まってきて、結果いいものができる」と、上山さん。この8年の成果は、果たして「西栗倉村だからできたこと」なのだろうか？

「つばう、企業理念と商品が都市の若者たちを中心に支持され、外貨を稼ぎ出しているのが(株)西栗倉・森の学校だ。代表取締役社長の井上達哉さんが開発した主力商品「ユカハリ・パネル」は、持ち運べる木の床。「百年の森林構想」に共感するエシカルな個人向けの商品だ。床に置くだけで無垢のフローリングになり、引越す時は持ち運べる。賃貸住宅に住むDIY志向の個人やシェアオフィスを中心に口コミで広まった。





店舗兼倉庫は、旧影石小学校のエントランス脇

建物の正面玄関すぐ脇にオープンしている「酒うらら」。出張日本酒バーで週2回は留守にするが、道前さんがセレクトしてきた日本酒の瓶がずらり。彼女のおすすめは、島根の地酒、玉櫻。



酒うらら 道前理緒さん

地域おこし協力隊の制度を活用して、西粟倉村で酒屋を開業。出張日本酒バーとの2足のわらじで、日本酒の普及に精を出す。

やりたいことが育つ村。そういう人が育つ村。



ablabo. 大林油佳さん

油の製造、販売、開発、コンサルティングを手がけて2年半。西粟倉・森の学校の社員を経て独立。かねてより考えていた、こだわった油づくりをはじめ。



西粟倉村の遊休施設を改築した工房で

起業以来すべて一人でやってきたが、売上が向上したことにあわせて最近スタッフを強化した。搾油機の購入に村の協力があり生産量が上がったことも大きい。搾りかすは良質の肥料となるため、ひきとってくれる農家を募集中。

西粟倉村ローカルベンチャー支援の拠点 旧影石小学校

A0(エーゼロ)株式会社をはじめ、西粟倉村のベンチャー事業者が集積する。西粟倉・森の学校が立ち上がった象徴的な場所だ。



新事業、ウナギの養殖

A0経営と並んで、牧さんがプレーヤーとして手がけているのが、ウナギの養殖事業。西粟倉・森の学校の木材加工場から出る木屑を燃料にして旧影石小学校の体育館に水槽を並べて、養殖をはじめている。

A0(エーゼロ)株式会社 代表取締役社長 牧大介さん

2006年から株式会社アミタ持続可能経済研究所の地域再生マネージャーとして西粟倉村に赴任。2009年より株式会社西粟倉・森の学校を設立し代表取締役就任。2016年にA0(エーゼロ)株式会社としてローカルベンチャー育成に力を入れる。



ローカルベンチャーのシリコンバレー。西粟倉村のこれから。

村の商社。「百年の森林構想」のために立ち上げた(株)西粟倉・森の学校を、創設者の牧大介さんは、そう位置付けている。商社機能のコアとして、村の森林から出る間伐材を商品に加工して販売する6次産業化をはかり「ユカハリ・タイル」などを販売。数年かかったが、木材加工は黒字化した。

地道な積み重ねがあった。「ローカルな人と人のつながり、人々自然のつながりを生み出して、地域に必要なけど、今ないもの」を生み出していくマーケティングと、推進する仕組み、運営していく人づくり、すべてが大事」。森の学校では、手探りをしながら実践を通してこれを構築していった。

「村と一緒にツアーを組んだり、現場で体験したことを紙とネットで紹介し、BtoCで売っていく」。西粟倉村のブランド構築、マーケティング、商品販売から移住支援、ローカルベンチャー支援まで、森の学校としてできることはすべてやった。その中で重要な位置を占め出したのがローカルベンチャー支援「自ら起業したい人、価値創造できる人」を求めて、移住をセットにしたロー

カルベンチャー支援をやってきた。地域が元気になるには仕事が必要。どの自治体も雇用促進が課題だが、西粟倉村は地域に根ざした起業家を募る。「村は姫路から電車で45分と田舎過ぎず、役場がチャレンジもさせてくれる」。もともと移住促進も「百年の森林構想」の重要な課題。仕事を起こしたい人に移住してもらえれば自ずと周辺に雇用も生まれる。「そこで、ローカルベンチャー支援に特化した事業のために、2016年にA0(エーゼロ)を立ち上げました」。

今、西粟倉村にはローカルベンチャー企業が20社近く。家具作り工房、酒屋、食用油づくり工房、獣肉解体業、帽子屋など、職種は多岐だ。「個人経営だったり家族経営だったり、いろいろです」。地域おこし協力隊の若者がそのまま移住するなど、Dターン者を中心に自分が得意な仕事を起業していた。

「西粟倉村だけでなく、全国の採用活動をサポートしていくことにしました」。まだまだ移住未満である「ビジネス志向の高い田舎好きの都会人」にどう情報を届けるか。メディア運営に力をいれていく。

「食卓でおいしい油をつかってほしい」。その思いで食用油の製造・販売を行う油屋「ablabo」を、西粟倉村で起業したのが大林油佳さんだ。学生時代に森の学校のインターンを経験し、そのまま入社し、西粟倉村に移住した。

「岡山県内の無農薬栽培農家からひまわりの種を仕入れ、焙煎して搾油機で搾ります」。1日60kgの種から10kgの油を、種に負荷をかけず低温で搾る。そのまま瓶詰めにしたヒマワリ油と、ハーブオイルをブレンドしたフレイバーオイルの二本立てだ。「ヒマワリ油の自然の美味



西粟倉村 産業観光課 主任 白旗佳三さん

西粟倉村を愛してやまない。ローカルベンチャーの若者と村とのブリッジ役として幅広い業務を担う。

「がんばっている蔵元を応援したい」と、西粟倉村で酒屋をはじめたのが「酒うらら」を営む道前理緒さん。「蔵元にとってお酒を伝えてくれるはずの酒屋が、その役割をさぼってきた。自分ががんばらなきゃという思いがあります」。

酒が好きで、蔵元を訪ね歩き、そこで飲んだおいしい酒だけを人に伝える。作っている人と話して、売りたいと思った日本酒だけを売る。「酒には飲み頃があります。甘口辛口というより、うま口。できたてよりも熟成がおいしいです」。飲み方もあわせてお客に酒の魅力を伝える本来の酒屋として、今は啓蒙の時期だ。酒の魅力が伝わっていない20〜30代に向けて、間口を広げることから裾野を広げる。

なぜ西粟倉村なのだろうか。「どこでもよかったけれど、好きで勝手に始めているのに役場が応援してくれるんです。どこか出る理由がみつかりません」。ここにいれば、他のことに気をとられず油づくり集中できる。大林さんがつくる油は、ablaboのオンラインショップと無印良品、自然食品店などで購入できる。

「出張日本酒バー」として全国にも出かけます。組みたいと思っただけの人が主催する場で、飲みながらお酒の良さを解説します。飲み比べをしたり、自分にとっておいしい酒をみつけましょう、とアピールします」。最近では東京方面にも出かける機会が増えてきた。

地域おこし協力隊として村にやってきた。「一升瓶を抱えてきたんです。びっくりしました」と西粟倉村産業観光課主任の白旗佳三さんは笑う。「西粟倉村にいれば、店の固定費がかからないのが魅力」。この店は1ターンの仲間との情報交換の場にもなっている。